（平成２９年９月１８日）

赤松小三郎研究会 講演会　のご報告

日時　　：Ｈ２９．９．１０（日）１３：３０～１５：４５
場所　　：東京・文京区民センター　３階Ａ会議室
出席者　：１０６名（同窓生７０名、一般３６名）

◎講演会『赤松小三郎関係史料を読む』
講師：寺島隆史　氏

今回は、文京区民センターで一般の方を含めて百名を超える大勢の参加のもと、講師に歴史研究家で元上田市立博物館長の寺島隆史氏（６７期）をお迎えし、講演会を開いた。

＜配布資料＞
１．本講演のレジメ～『赤松小三郎関係史料「京阪御用状往復留」（上田藩庁文書）を読む』（寺島隆史氏作成）

＜内容＞
〇赤松小三郎研究会 会長 丸山瑛一　より挨拶
〇同研究会　事務局長　小山平六より講師寺島隆史氏の紹介

〇講演要旨

１．初めに

・史料**「京阪御用状往復留」**（けいはんごようじょうおうふくどめ）とは、上田藩が作成し国元と京都の藩邸が交わした書状などの写しを冊子にしたもの。上田市立博物館所蔵でこれまでの研究でほとんど扱われなかった古文書。
・同史料の慶応３年６月から赤松小三郎が暗殺される慶応３年９月までを読み解くことによって、小三郎と上田藩の関係及び小三郎暗殺の背景を探ることができる。

２．会津藩との関係

（１）少なくとも慶応３年６月の時点で小三郎は会津藩にも軍事調練を行っていたことがわかる

・場所の明記はないが、約千人もの会津藩兵を調練するスペース等を考慮すると、恐らく京都守護職(会津藩主松平容保)本陣であった金戒光明寺境内であろう。
・今までこの時期小三郎は薩摩藩に招かれて軍事調練等を行っていたことは知られていたが、これによって「幕薩一和」を願う小三郎は敵対する両陣営に乞われるままに教えていたことになる。

※金戒光明寺について・・・小三郎暗殺後、薩摩藩によって小三郎の葬儀が行われ、同年１２月に墓も建てられたが、そもそも上田藩とは以前から縁がある。ここには松平上田藩初代藩主松平忠周（ただちか）の墓がある。また忠周は藤井松平家三代でもあり、藤井松平家初代、二代の墓もここにある。

（２）**会津藩が小三郎の京都滞在を望んだ一番の狙いは、小三郎を通じて薩摩藩の内情を探ることであったことがわかる**

・上田藩が幕府（在京中の主席老中板倉勝静）からの小三郎の開成所教官採用申し入れに対し、小三郎は上田藩に必要な人物であることを理由に断り（慶応２年１２月）、小三郎に再三の帰国命令を出していた。一方「幕薩一和」実現のため帰国したくない小三郎は仮病などで帰国命令を拒否し続けていた。これに対し、会津藩は京都上田藩邸を通じて小三郎を帰国させないよう申し入れている。その理由として、①会津藩は引き続き小三郎から軍事調練をお願いしたい、**②小三郎は薩摩藩にも軍事調練等を行っているが、最近薩摩藩に不穏な動きあり小三郎に薩摩藩の動向探索をしてほしい、それが徳川家及び上田藩の為になる**、としている。
・上記会津藩の申し入れ交渉人が「公用人 外嶋喜（機）兵衛」とあり、小三郎の兄柔太郎宛書簡にある「会津公用人」とはこの外嶋を指すのではないか。また、京都上田藩邸の直接の交渉役は京都上田藩留守居代（←代とは留守居役の代理ということ）赤座寿兵衛。京都上田藩留守居役は小三郎の良き理解者であった山田貫兵衛（藩軍制改革の中心人物）。

（３）**小三郎が（暗殺直前の）帰国に応じた経緯がわかる**

・上記（２）のように上田藩は、小三郎登用を幕府に断った経緯もあり、また小三郎の政治的な動き（種々の建白書提出、等）が心配で、小三郎の「帰国は必須」との立場だった。(「御改正口上書」は京都上田藩邸を通じて上田藩へも提出していたのではないか・・寺島氏)
・上田藩は慶応３年６、７、８月と、小三郎帰国に関して政争激しい国元（上田）・江戸・京都間の書簡を通じてのやり取りをした末に、**会津藩からの「先ずは小三郎を帰郷させてくれ、本人も帰る気になっている」との申し出に応じる形で**、赤座が同年９月１日に小三郎に帰国を申し達した。それに対し小三郎は重陽の節句（菊の節句）の９月９日前に出立すると赤座に申し出ていた。このように会津藩からの口添えもあり小三郎としてはこの帰国は決して「上田藩からの厳命に屈した」というわけではなかった。

３．小三郎の暗殺、そして薩摩藩との関係

（１）小三郎の暗殺（慶応３年９月３日夕方）について、京都上田藩邸（赤座寿兵衛）から江戸上田藩邸経由での国元への報告内容が詳細にわかる

・同年９月８日付けの御用状で赤座から国元の家老宛に次の内容を報告している。①詳細な小三郎の疵口（傷口）の様子（いわゆる医師の死亡診断書）、②９月４日（暗殺の翌日）の昼間に検使（殺人・傷害事件などを調べる役人）立会いが滞りなく済んだこと、③９月５日夜に京都町奉行役人から遺体と大小（刀）・衣類等を取り片づけて良いと言い渡された、④９月６日葬儀は金戒光明寺で多数の「薩州様御家来、小三郎内弟子」等参列のもとに盛大に済んだこと

（２）**薩摩藩が同藩内での小三郎の立場を「（上田藩から）借入れ中」と強調している**ことの真意とは・・・

・上記（１）同年９月８日の赤座からの御用状には、暗殺後間もなく薩摩藩京都留守居東條慶二が京都上田藩邸に来て、「斬られたのが小三郎だと分かったので薩摩藩主の命で手当てをするために駕籠にて一旦彼の旅宿へ引き取り、その後御屋敷（京都上田藩邸）へ届ける」と伝えた、とある。

・同年９月１４日付けの赤座からの御用状での報告内容は次の通り。①薩摩藩主（島津茂久）から頂いた品の目録（金百両も含む）、②薩摩藩によって小三郎の身の回り品が整理されて、かつ運送料五両でもって国元実家へ送られたこと

・そして注目すべきは、同年９月１４日付けの赤座からの御用状で、９月８日付け使者東條慶二を通じて薩摩藩主島津茂久から上田藩主宛に手控（手紙）を受け取った記載がある。内容は『伊賀守様へ　御家来赤松小三郎、此の節不慮の横死に付いては、**御借入れ中**の事にもこれ有り、一入（ひとしお）残念御気の毒に存ぜられ候。右に付き**長々御借入れ**申し候て御手支えの程察し存せられ候。取り敢えず使者を以て御挨拶旁（かたがた）申し述べられ候に付き、目録の通りこれを進覧致され候。此の段兼て申し付け越し置かれ候。松平修理太夫　使者　東條慶二』

⇒**薩摩藩は、赤松小三郎を「借入れ中」、つまり家来に準ずる者として認識していたことを強調している。**小三郎の旅宿もやはり薩摩藩が世話をしていたものだろう。

一方、上田藩としては「借入れ中」とは認識していなかったことがこの後の御用状のやり取りでわかる。

このことによって暗殺後の上記薩摩藩の不可解な行動《遺骸を運ぶ駕籠の手配や一旦遺骸を旅宿まで運んだうえで上田藩邸に運ぶと主張、薩摩藩主名での多額（百両）の見舞金の差出し、小三郎の荷物を（勝手に）薩摩藩側で荷作りして（おそらく薩摩藩にとって不都合なものは処分して）運送料（５両）まで負担、等》は説明が付くが、**逆に、段取りの手際の良さ、そつの無さからみても、小三郎暗殺は在京の薩摩藩上層部も了承のえでの犯行に違いないとみられる。**

（３）薩摩藩国父・島津久光は小三郎暗殺を了解していた

・今回は資料としては用意していないが、元薩摩藩士が明治中期に茂久（忠義）に関わる史料を集めた「忠義公史料」にある**『中将公（久光）、御出立前夜、（赤松を）打果候ヨシ」**の記述がある。今回の往復留の記述を合わせて、素直に読めば、久光が小三郎暗殺を了解していた、と解釈できる。

小三郎が薩摩藩のために「重訂　英国歩兵練法」の翻訳を行ったり（久光からお礼に「新製１６響ヘンリー騎兵銃」を賜った）、塾（京都薩摩藩邸）での教授、薩摩藩士への軍事調練実施、等々久光は小三郎には大変恩義を感じていたはずなので、久光が暗殺を了解するはずがない、と考えたくもなるが、実際には時代は動き、このまま上田藩（＝譜代、会津ともつながっている）へ帰国すれば小三郎は薩摩藩にとって不都合になると最終的に判断してのことだったのだろう。

以上

赤松小三郎研究会事務局　荻原　貴（７９期）